

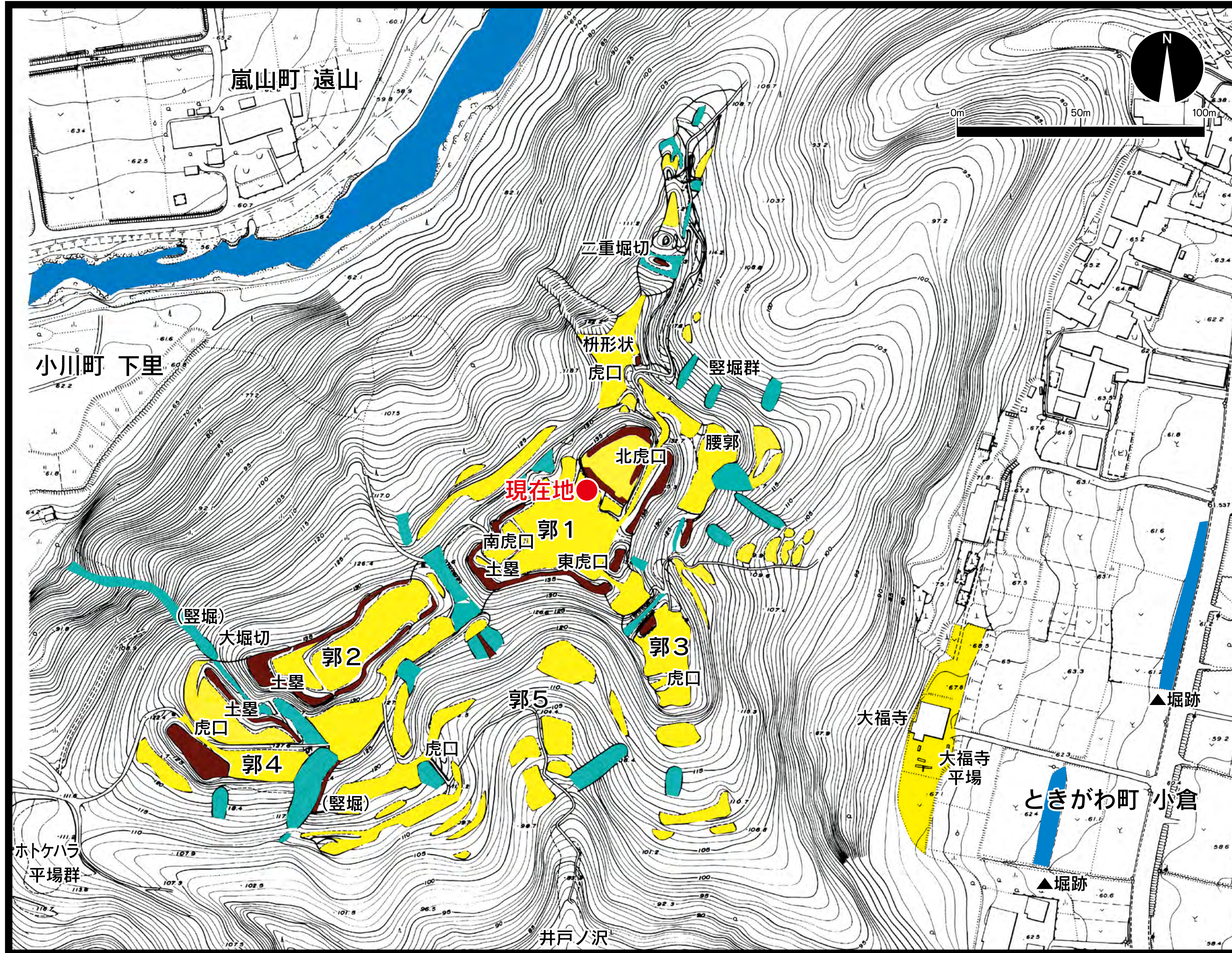


国指定史跡 比企城館跡群

小倉城跡

ときがわ町大字田黒字城山1184ほか
平成20年3月28日指定

◆ 平面図 ◆



◆ 小倉城跡について ◆

小倉城跡は、外秩父の山地と関東平野の境界にあり、大きく蛇行を繰り返す槻川の先端に構えられている。城跡は立地として槻川―都幾川―古荒川水系の河川交通を基本に、陸路は鎌倉街道上道と山根筋（八王子―鉢形を結び上州へ抜けるルート）の中間にあたり、中世の幹線ルートを意識した位置どりをとっている。

占地と縄張りの構造は、自然地形を巧みに取り込むことにより、同心円的に画された総構空間の中心に、居館と目される山麓の大福寺平場と、その背後に展開する梯郭式の要害部分が構成されることである。

要害部分は、南北方向に走る主尾根に沿って、郭1と郭2を並列して配置し、郭1南東と郭2南西を堀切り、郭3、郭4を設ける。郭5は、井戸沢と呼ばれる谷に面している。

郭1は、尾根の最高所に位置し、すべての導線がこの郭に収束すること、土塁の規模が大きく、虎口の構造も厳重であることから、主郭（本郭）として位置づけられる。この他、横堀とセツになったクランク状の塁線の折れ、それに組み合わされた塹堀等の技術的に優れた普請が行われている。

城跡の北東へ1.5kmの嵐山町平沢寺には、長享4年（1488）の須賀谷原の合戦の折に山内上杉方の陣所がおかれている。江戸時代の諸記録では、『新編武蔵風土記稿』に、後北条氏重臣遠山氏、『武蔵誌』では、比企戦国史に重要な位置を占めた上田氏を城主としているが、最新の発掘調査による城跡の年代推定は、16世紀前葉～後半と判明している。

この城の最大の特徴は、基盤層に結晶片岩の岩盤を持つことに由来する、大規模な石垣普請にある。本郭土塁内堀や虎口部、郭3外面を中心に随所に見られ、総延長150m以上、最大高5mにおよび累々と積まれた様は圧巻で、「石造りの山城」と呼ぶにふさわしい。県内在地系石垣の到達点と評価される。

この城は、石垣、縄張りの点で優れた遺構を今日に伝えており、東国の戦国期中小規模山城を代表する史跡である。また、木の繁茂した現在でも青山城跡や菅谷城跡、松山城跡を目視できる位置関係にあり、山陵と河川の織りなす景観は、比企地方の代表的な中世的景観を今なお色濃く残している。



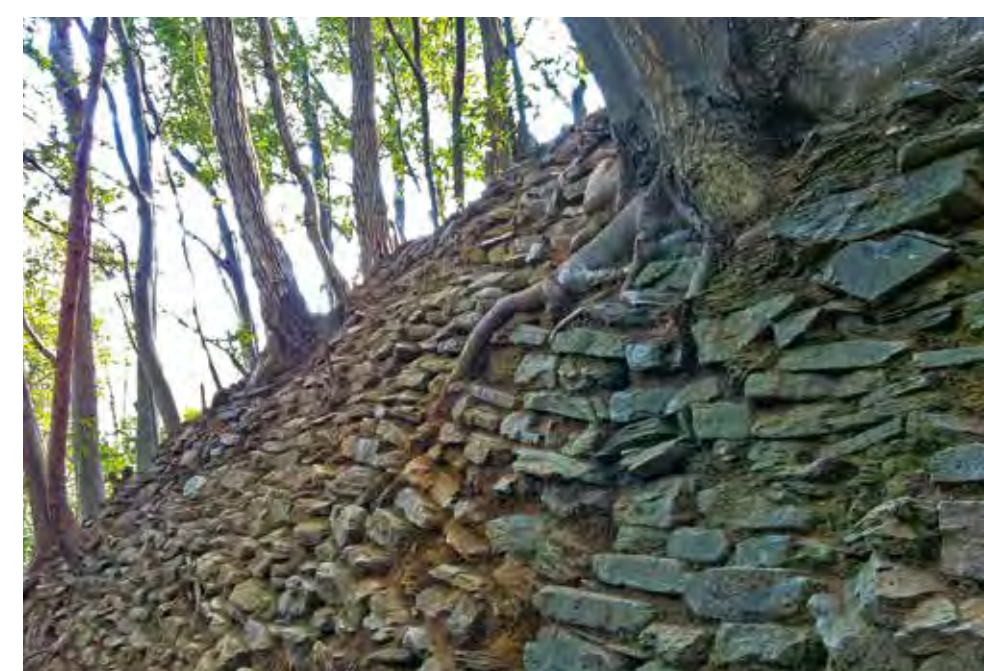
◆ 主な見所 ◆



小倉城跡航空写真(北より)



郭1土塁内堀石垣(東から)



郭3外面石垣



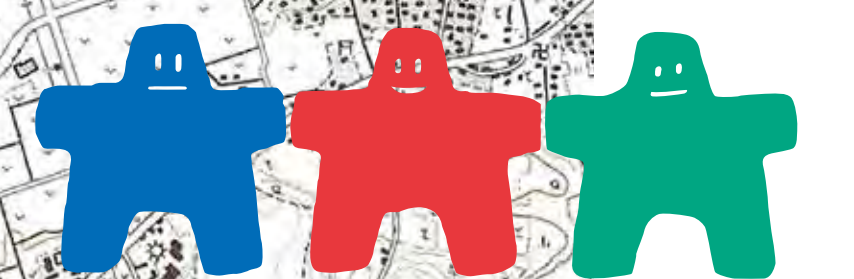
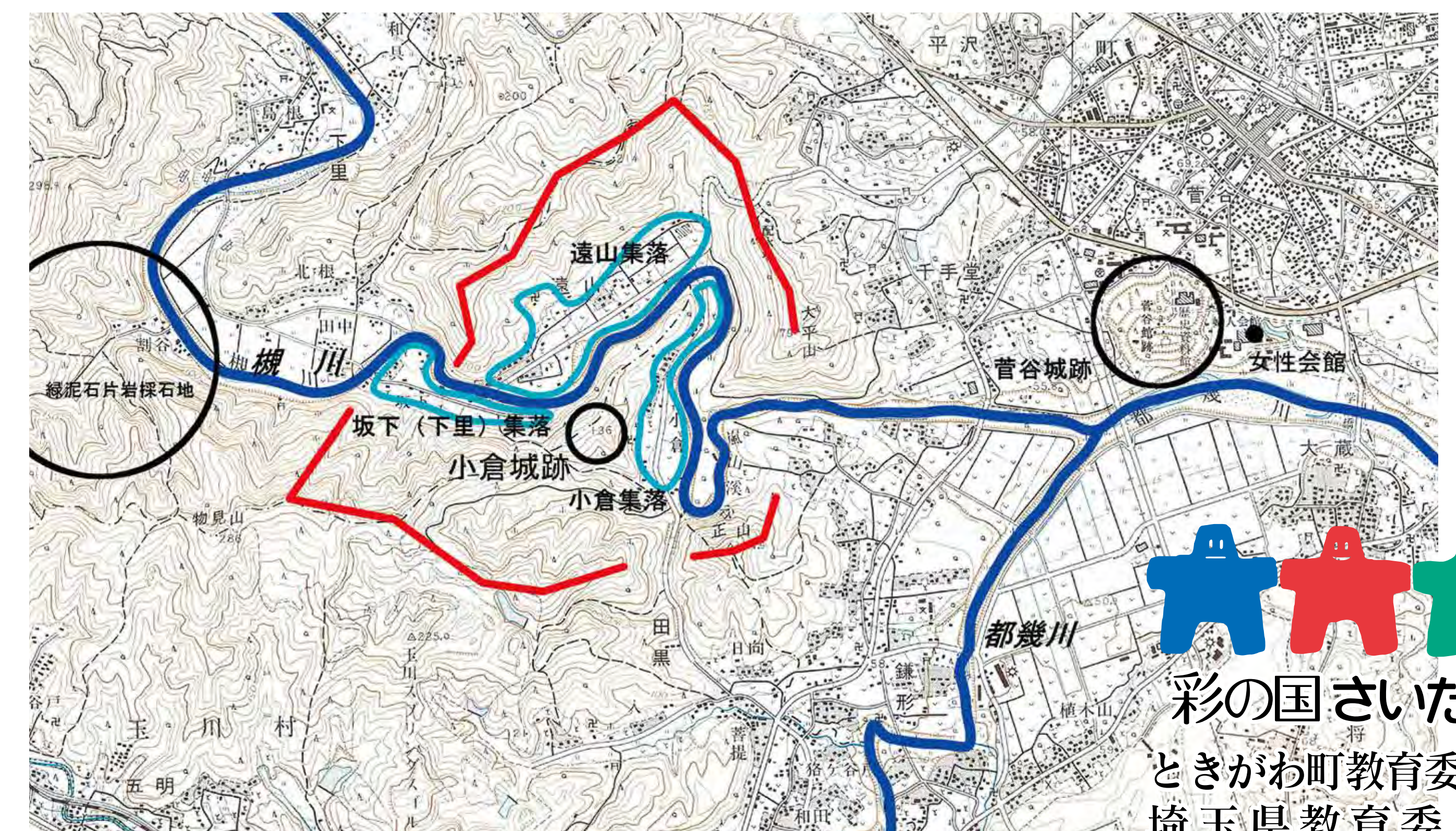
郭1土塁内堀石垣(西から)



郭1南虎口



枡形虎口



彩の国さいたま

ときがわ町教育委員会

埼玉県教育委員会

自然地形の外郭線 中世の集落 河川